

平成18年度 秋田県公文書館企画展

秋田藩の海防警備



期 間

前期：平成18年 8月25日(金)～ 9月19日(火)
後期：平成18年10月24日(火)～11月12日(日)

場 所

秋田県公文書館2階特別展示室 10:00～17:00

展 示
説明会

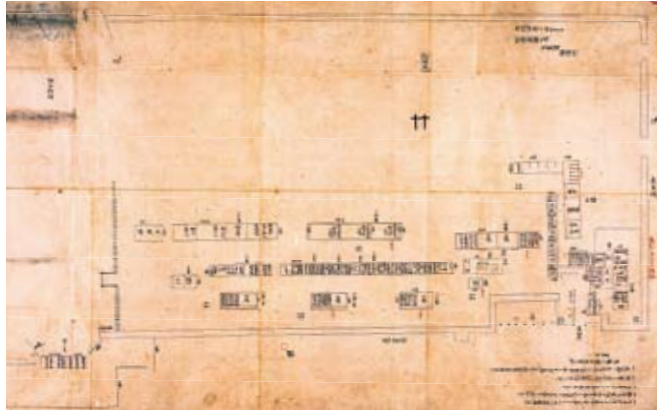
第1回歴史講座「秋田藩の海防警備」展を語る
平成18年9月9日(土) 13:30～15:00

Akita Prefectural Archives

秋 田 県 公 文 書 館

箱館七重浜御陣屋図

(県C-361)



これは秋田藩が現在の北斗市七重浜に築いた陣屋の絵図です。七重浜は箱館市内から約五キロ離れた位置にあります。

絵図を見ると、陣屋の門を入つてすぐ右には①火の用心②喧嘩禁止③大酒禁止④他所への出入り禁止⑤整理整頓の励行を促す制札があるのが分かります。

敷地は表門の左右約三百六十メー

トル、奥行き約百八十メートルの広さを持ち、五百九十一人の藩士がいました。

陣屋は六月十九日に秋田藩に引き渡され普請が開始されますが、八月十九日には帰国が許可されたことで撤収するので、正味一ヶ月程しか使用されませんでした。

文化の出兵から四十九年後の安政三年(一八五六)七月十八日、箱館留守居として赴任する長瀬隼之助が、その跡にたえずみ先人の苦勞を回想しています。その様子は「檀堂日録」(混25-1170)にあります。

(前期のみ展示)

餌指湊絵図

(県C-360)

文化四年(一八〇七)秋、作成の絵図です。

箱館奉行から出兵要請を受けた秋田藩は、藩士を二陣に分けて出発させました。六月十日第一陣が箱館に到着すると、箱館奉行吟味役から、松前へ行くよう命じられました。

しかし箱館を守備するつもりで来た秋田藩士たちは抗議し、その四日後、

箱館七重浜の警備が正式に決まりました(「大山矢五郎日記」AH393116)。

結局秋田藩士は江差には行かなかつたのですが、箱館から藩士が撤収した後にこの絵図を作成しているところを見ると、再度の蝦夷地出兵を想定していたということが言えます。

(後期のみ展示)



松前市中絵図

(県C-362)



文化四年(一八〇七)三月二十二日、幕府は松前藩を陸奥国梁川に移し、蝦夷地全域の支配は幕府が行うことになりました。

これに伴い蝦夷地における幕府の出先機関を箱館から松前に移し、名称も松前奉行と改めました。

秋田藩が松前の警備を行うことはありませんでしたが、この絵図を作成したのは、前項と同様、再度の蝦夷地出兵を想定してのことだと考えられます。

(後期のみ展示)

はじめに

この展示は、文化四年（二八〇七）の箱館出兵以後の秋田藩の海防警備に関する絵図や史料を紹介するものです。

約二百六十年間続いた江戸時代は、日本史上まれに見る戦争のない時代でした。

しかし江戸時代も末期になると外国船が日本近海に出没し、平和馴れた日本人に揺さぶりをかけるようになります。

その最初がロシアでした。寛政四年（二七九二）ラツクスマンが根室に來航し交易を要求。更に文化元年（二八〇四）にはレザノフが長崎に來航し、再び交易を要求します。

幕府はロシアからの要求は拒絶しますが、嘉永六年（一八五三）アメリカのペリーが江戸湾に現れると、翌安政元年日米親善条約を締結して開国に踏み切ります。そして安政五年（一八五八）に日米修好通商条約を締結したことで、日本は世界経済の中に組み込まれました。

しかし貿易を開始した直後から急

激な物価上昇が起こり、その上長州藩との戦争に敗れたことで、幕府は統治者としての求心力を失い、滅亡していきまます。

こうした全国的な動向を踏まえつつこの時期の秋田藩を見ると、ロシアの蝦夷地進出を防ぐ先兵として警備に駆り出されていたことが分かります。つまり、江戸時代の秋田藩は、他の藩よりも早い段階で外国からの圧力を感じ取った藩であったと言えます。

しかし、幕末期の秋田藩を見ると、軍制改革も中途半端なまま戊辰戦争に巻き込まれる経過をたどりまました。

明治維新の勝者となった西南雄藩を見ると、外圧の危機意識の下で藩政改革や軍制改革を成し遂げたという特徴があります。

では何故秋田藩では、外圧が藩の近代化に結びつかなかつたのでしょうか？

私たちがこの展示を企画した問題意識はここにありまました。

秋田藩の蝦夷地出兵や領内の海防警備に関する絵図や古文書を見ていく中で、幕府からの命令で北海の守りに就いた秋田藩士の胸に去来したものを探っていきたいと思いまます。

展示は、大きく次のように分かれて

おりまます。

- ① 文化四年の箱館出兵
- ② 対外危機の高まり
- ③ 海岸絵図
- ④ 台場の築造
- ⑤ 安政の蝦夷地出兵

文化四年の箱館出兵

文化三年（二八〇六）長崎で通商を

断られたロシアのレザノフは、部下のフォストフに樺太を攻撃させまます。フォストフは樺太のクシュンコタンに上陸し、運上屋、倉庫、弁天社を焼き払い、番人四人を拉致しまました。

翌文化四年、フォストフは択捉島とクシュンコタンに上陸し、略奪・放火・拉致を繰り返しまます。

ロシア船来襲の報を聞いた箱館奉行羽太正養はぶたまさやは、五月十八日、弘前藩・盛岡藩・秋田藩・鶴岡藩に蝦夷地への出兵を要請しまます。

この要請は五月二十四日に秋田に届き、藩主佐竹義和よしまさは翌二十五日には出兵する藩士の任命を行い、総勢五百九十一人を箱館に送りまました。

また、前期開催と後期開催で大幅に展示品を入れ替えます。どうぞお見逃さないよう、多くの絵図や古文書をお楽しみください。

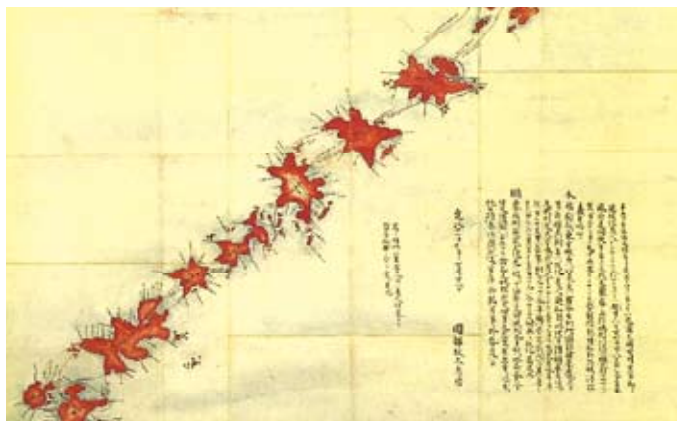
しかし箱館に出兵してみると、そこは至つて平穩であり、江戸から出張してきた若年寄の堀田正敦は秋田藩士に帰国を許可しまます。その結果、出兵した藩士は八月二十三日には秋田に帰国しまました。

こうして文化四年の箱館出兵は極めて短期間に終了しまます。これを期に秋田藩は領内沿岸の警備体制を作り上げていきます。更に幕府から再び蝦夷地出兵の命令が来ることを想定して、即座に対応できる体制を整えていまました。

重い具足櫃を背負つて、約二百年間忘れていた戦争体験を味わう秋田藩士たちの姿を思い浮かべながら展示品をご覧ください。

チブブカ諸島の図

(県C-357)



これは岡部牧太秀緒が寛政十二年(一八〇〇)年七月二十八日に描いた千島列島の絵図です。

この絵図は構図・端書き・日付が、近藤重蔵が描いた「蝦夷地図式坤」と全く同じです。

異なるのは絵図の端書きの文中から近藤の経歴を述べた一文が削除されていることと、名前が岡部牧太秀緒にな

っていることです。

ここからこの絵図は、近藤重蔵の「蝦夷地図式坤」を岡部牧太秀緒が剽窃したという説があります(秋月俊幸著『日本北辺の探検と地図の歴史』一九九九年 北海道大学図書刊行会)。
ちなみにこの絵図は、同時に展示する「ロシアの絵図」と接続するようになっています。(後期のみ展示)

松前絵図

(県C-363)



岡部牧太秀緒が文化三年(一八〇六)に描いた絵図です。

絵図の端書きには、寛政十一年(一七九九)から十二年に東蝦夷地、文化三年に西蝦夷地を測量し、オホーツク海沿岸は最上某(徳内)と田辺某(安蔵)の分見図を用いたという一文があります。

しかしこの絵図の構図は近藤重蔵が享和二年(一八〇二)に描いた「蝦夷地図式乾」と同じで、これも近藤の絵図を基に作成したと考えている研究者がいます(秋月前掲書)。

岡部牧太秀緒については①秋田出身の測量家らしい②寛政末年に近藤重蔵に従って択捉島に赴き、文化三年まで蝦夷地で活躍したようだ、としか分かていません。

ともあれ、現在私たちが目にする北海道の形に極めて近い絵図であり、この時期の測量技術の進歩と絵図の完成度の高さに御注目ください。

(後期のみ展示)

蝦夷地全図

(A292-31)



十九世紀初頭から描かれるようになった絵図で、航海の目印となる岬や断崖が大きく描かれているのが特徴的です。

この種の絵図は「実用絵図」と言われ、漁場経営地へ至る案内図として多く利用されました。

また、残存する蝦夷地の絵図で一番多いと言われております(秋月前掲書)。

絵図を使う人にとっては、目印になるものが大きく描かれた絵図の方が、使い勝手が良かったわけであり、興味深いです。

対外危機の高まり

ロシアのシベリア進出は十七世紀初頭から始まり、その目的はテンヤラツコの毛皮の獲得にありました。

十八世紀になるとロシアは千島列島に進出しますが、本国より遠く隔たった地であるため、物資の補給が著しく困難になる問題に直面しました。その解決策として考えられたのが、日本に食料・薪水を要求することでした。

当時の日本人はロシア人を「赤人」「赤蝦夷」と呼び、工藤平助（一七三四～一八〇〇）や林子平（一七三八～九三）はその著述で、ロシアの蝦夷地進出に警鐘を鳴らしました。

ここでは、公文書館所蔵の絵図を通して、江戸時代後期の対外危機の高まりの中で、秋田藩庁や藩士がどのような絵図を集めたのかを見ていきます。

また、外国人と戦わなければならない事態が発生した時に、武士はいかに戦うべきか？を考えた秋田出身の思想家佐藤信淵（一七六九～一八五〇）の絵図を紹介します。

三国通覧図説

(2159)



安政年間に箱館留守居を勤めた長瀬隼之助の家に旧蔵されていた史料です。

「三国通覧図説」は林子平が天明六年（一七八六）に刊行した軍事地理書で、ロシアの蝦夷地侵略を警告しています。

しかし「三国通覧図説」と、同じくロシア進出に危機を唱えた「海国兵談」の出版が幕府政治を批判するものとして、林子平は寛政四年（一七九二）に処罰されました。同時にこれらの書の版木も没収されました。

長瀬隼之助がどのような手段で「三国通覧図説」を入手したのか不明ですが、蝦夷地の海防に関与する藩の一員として、その内容は大いに関心があったと思われる。（前期のみ展示）

自走火船図

(弥高145・146)

出羽国雄勝郡西馬音内に生まれた佐藤信淵は十六歳のとき江戸に出て、蘭学、儒学、天文地理暦算測量を学びました。

文化六年（一八〇九）四十一歳の時、徳島藩兵学講師となり外国船に対抗する「自走火船」を考案しました。

展示する絵図二点の内一点は、弘化四年（一八四七）の作であり、ここから佐藤信淵は、最初に考えて以来約四十年間、自走火船を海戦の切り札として提唱していたことが分かります。

（前期のみ展示）



前期の展示では「自走火船図」の他に「禦侮儲言下」や「異風砲異様船製作記」、そして「新製小艇放大銃纏全」を展示します。

「禦侮儲言下」では、自走火船が岸辺から出航し、ロケット推進で海上を進み、外国船を猛然と攻撃するシーンが描かれています。

全く実用的でないプランの数々をお楽しみください！

台場の築造

台場とは海防用の海岸砲台のことです。特に江戸湾に造られた品川第三台場は、埋め立てが進んだ今日、近くにフジテレビ本社があることで有名です。

秋田藩における台場築造は、嘉永六年（一八五三）から始まっており、アメリカ東インド艦隊提督のペリーが江戸湾に來航したことがきっかけでした。それだけ危機感を持ったのでしょう。

しかし台場の守備兵については藩士ではなく、献金により武士に取り立てた「新家」と呼ばれる農民・商人を充てることを当初から計画していました。

また、この時期江戸家老を勤めていた佐藤源右衛門は、「御台場の土俵にて手輕の御拵にて決て不苦候…旁御手厚の御拵に不相及候」と、台場の築造を簡単に済ませるよう指示を出しております（「江戸來書自筆留書」A S 3 1 2 1 5 7）。

これは、箱館へ向かう蝦夷地御用係の堀利熙が秋田藩領内を通過するのに合わせて台場築造をアピールしさえすれば良いとする判断から発した指示で

した。

更に佐藤源右衛門は財政上の理由から、西洋砲術に造詣の深い吉川久治（海岸絵図を作成した人物です）を退け、和式砲術で十分だという見解を持つていました（前掲史料）。

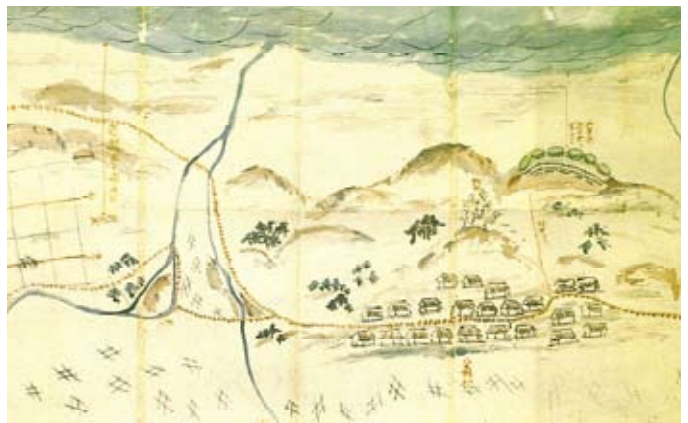
こうして、幕府の目を気にして簡便な工法で造られた大砲のない台場に、銃器の取り扱いに不慣れな裕福な農民・商人が守備兵として詰めるという海防のスタイルができあがります。後に大砲は配備されていきますが、弾薬、訓練とも不十分なまま戊辰戦争を迎えることになりました。

山本郡八森村海岸絵図

（県C-1131）

現在の八峰町八森の景観が描かれた絵図です。

絵図右上には台場が描かれており、また川の対岸に、台場を守備する新家の居住地が造られたことが分かります。（前期のみ展示）



百三段濱田村之内中村御台場

（県C-251）

秋田市浜田に築かれた台場の絵図です。現在の雄物川河口左岸にあったと伝えられています。

絵図を見ると、台場の中央に「唐船番所」の記載があります。

ここから、江戸時代初期から置かれていた唐船番所が、江戸時代後期の海防備の必要性から台場に転用されたことが分かります。（前期のみ展示）



展示では絵図の他に、男鹿半島で新村「渡部村」を開いた渡部斧松（一七九三～一八五五）が配下の百姓六十人を足輕に取り立てて欲しいと願った口上書を紹介します。

幕末秋田藩の台場の守備は、こうした民兵で賄われますが、ここには足輕になりたい有力農民と、献金を受けたい藩首脳の利害の一致がありました。

海岸絵図

ロシアに続いて日本近海に現れるようになったのはイギリスです。進出の目的は捕鯨にあり、良質の鯨油を求めて、イギリスの捕鯨船が日本近海に現れるようになります。

これに危機感を抱いた幕府は文政八年（一八二五）二月十八日異国船打払令を發布し、近海に近づく外国船への砲撃を命じました。

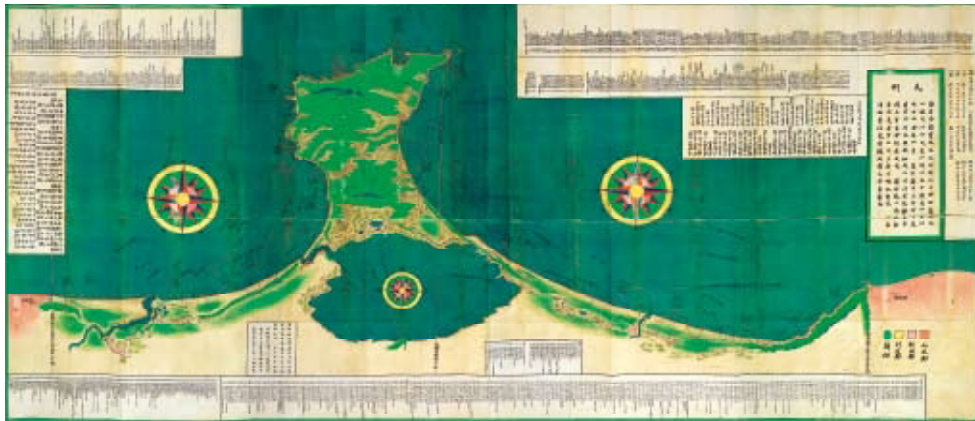
しかし、イギリスがアヘン戦争で清国を破り、天保十三年（一八四二）六月二十三日にオランダから、イギリスが日本に対して開国を迫っているという情報を得ると、異国船打払令を撤回し、江戸湾防備体制の強化を図ります。

そして嘉永二年（一八四九）九月、幕府は全国の大名に海岸絵図の作成を命じます。

迫り来る外国船の脅威を感じつつ、測量術を駆使して完成させた絵図を見ると、そこに秋田藩の絵図作成技術の頂点を感じる感じがします。

海岸絵図

(県C-1598)



嘉永二年十月、秋田藩に次の事項を書き入れた海岸絵図作成の命令が届きます。

- ① 城下や村から海岸までの距離
- ② 沖合約五十四メートルから約三千二百七十メートルの水深

③ 隣領領主の名前

実は秋田藩ではこの年の五月から十月にかけて幕府から国目付を迎えており、その準備として海岸絵図を作成しておりました。命令を受けた時、この絵図に通達事項を書き入れた海岸絵図を作成し提出することも検討されました。

しかし御用人兼御境目奉行の吉川久治は近代的な測量術を駆使して海岸絵図を完成させました。

男鹿半嶋図

(地7)

男鹿半島の景観や人々の生活が描き込まれた絵巻です。作者や作成年代などは不明です。

天保七年（一八三六）に秋田藩が策定した海防計画では、遠浅の砂浜には大型の外国船は近づけないとして、外国人の上陸地点を能代・男鹿半島・土崎湊・新屋に想定していました（『国備考并急時之手配』AT39319）。

実際、安政六年（一八五九）七月二日

にはロシア人が男鹿半島に上陸し、薪を盗んで去るという事件が発生しています。

この絵図には細かい岩場の名前が記されており、一見美しい絵図も、使えば、男鹿半島の地名を海防担当者共通認識にするための軍事用として使われた可能性もあります。

(前期のみ展示)



宗谷出張御陣屋略絵図

(混7-1553)



安政二年(一八五五)夏、宗谷出張陣屋を建設するため下見に訪れた平元貞治は①大根・木瓜・豆なら栽培できそうだ②十月下旬より雪が降り、積雪は約一・五メートルになる③寒気は非常に厳しい④樺太までの海上は非常に危険である、等を報告しています(「蝦夷地見分書取」混7-1563)。

安政三年以降、宗谷の出張陣屋に

は、五十九人の藩士・足軽・従者が詰めました。冬季は閉鎖し、増毛の元陣屋に撤収しました。(前期のみ展示)

北蝦夷地クシユンコタン出張御陣屋境内絵図

(乙1-156)

安政二年(一八五五)の蝦夷地警備の命令により、秋田藩は樺太のシラヌシに八十人、クシユンコタンに五十五人の藩士・足軽・従者を送りました。宗谷同様、冬は増毛で過ごすことになっていました。この内クシユンコタンの陣屋は入口左右約五十四メートル、奥行き約百八メートルの広さであったことが絵図から分かります。

安政四年(一八五七)六月十日、クシユンコタンを訪れた仙台藩士の玉虫左太夫は台場を見て、もし外国船が来襲してきた場合「カ、ル山麓ニテハ四面敵ヲ受ケ瞬息ノ間落城ニイタルベシ」と述べております。

更に玉虫は陣屋に詰める藩士を見て「佐竹公ノ警衛人数日々何ノ業モ致サズ釣竿等ノ楽ヲイタシ、其上酒宴等ニ耽リ不埒ヲ極メ居ル由」と感想を述べております。

しかし批判がましきことを述べた玉

虫は、仙台藩の白老陣屋(現北海道白老郡白老町)の様子を顧みて「折々調練ヲイタセバ漁業ノ妨ゲニナル杯ト申テ詰合役人ヨリ停メラレタル由。カ、ル事ニテハ外ニイタス事モアルマジ、釣竿ノ楽ニテモ致サズバナルマジ。当初モ定メテ右様ノ事ニテアルマジヤ。公儀ノ吏勝手ノ義申触ラス、実ニ可悪次第ナリ。只外見ヲ飾リ賄賂等ヲ能ク行ヒナバ、釣竿ハ勿論何ヲ致ソウガ宜シキ様トリナシ、自分勝手ヲ計ル者奸吏ノ癖ナレバ、諸家警衛人数拵定メテ迷惑ナルベシ。佐竹公ノ一条ニ付推シテ知ラル。嘆息ノ至リナリ」と幕府による蝦夷地警備のあり方を非難しております(「前掲書」)。

軍事訓練をすれば、漁業に差し障りがあるからと言ってやめさせる。だから釣りでもするしかない藩士。賄賂さえもらえば釣りを許可する幕府の役人：ロシア船対策のために始まった蝦夷地警備の実態は、このようなものだったのです。対外的な危機意識が高まったからといって、実際に警備に参加した藩士が、即改革を志向しなかったのもうなずけます。(後期のみ展示)



蝦夷地の陣屋に詰めた足軽の多くは農民でした。藩は武士に準ずる身分を与えることで、農民を蝦夷地に移住させ、警備に就かせようとした。

しかし石井忠行の慶応二年(一八六六)の日記には、増毛から足軽が脱走する記事がしばしば見られます。蝦夷地の厳しい自然環境の前に、足軽の士気は完全に低下していたのです。

慶応三年、秋田藩は蝦夷地の領地返上を幕府に願ひ出て蝦夷地から完全に撤退しますが、その時には既に陣屋での警備態勢は大きく崩れていた可能性があります。

安政の蝦夷地出兵

嘉永六年（一八五三）九月一日、ロシア兵が樺太のクシユンコタンに上陸し、翌年四月十八日まで占領する事件が起ります。

これを重く見た幕府は安政二年（一八五五）二月二十三日、蝦夷地の大部分を松前藩から取り上げ、廃止していた箱館奉行を復活させ、これに管轄させました。

そして四月十四日、幕府は松前藩以外に、仙台藩・盛岡藩・弘前藩、そして秋田藩に蝦夷地の海岸警備を命じます。

秋田藩は、積丹半島から知床半島に至る広大な海岸線と、樺太沿岸の警備が命じられました。

安政六年（一八五九）になると幕府は、先の五藩に鶴岡藩と会津藩を加えた七藩に蝦夷地を分割して統治させる命令を下します。

これにより秋田藩には現在の増毛町周辺と宗谷支庁一帯が領地として与えられました。

しかし、秋田藩は蝦夷地開拓に本気で取り組む姿勢はなく、万延三年（一八

六〇）に樺太警備の免除を願い出、更に慶応三年（一八六七）には蝦夷地の領地返上を願い出ます。幕府がこれを認めただことで、秋田藩は蝦夷地から完全に撤退しました。

増慶御陣屋 御任地内略図 (乙一153)



安政二年（一八五五）、秋田藩は幕府から蝦夷地警備を命じられた際、元陣

屋を増毛に、出張陣屋を宗谷と樺太のシラヌシとクシユンコタンに置くよう指示されました。

秋田藩が安政年間に蝦夷地警備を開始する時の増毛の場所請負商人は伊達林右衛門で、絵図中の「運上屋」とある建物が漁場経営のために置かれた拠点です。

この絵図を見ると、任地面として朱引きされた線内には運上屋が入っていないことが分かります。ここから、蝦夷地の警備は各藩に任せるも、そこでは経済的な収益をあげることはできないようにする、という幕府の方針が如実に表れていると言えます。

増慶元御陣屋地割絵図 (乙一154)

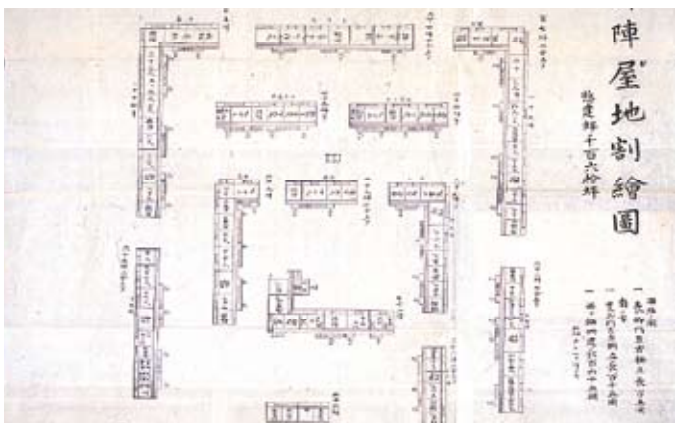
増毛に建設された元陣屋の絵図です。表御門の左右は百八十九メートル、奥行きは二百九十七メートルありました。建物二十八棟の建坪は千百六十坪ありました。

ここに最初に赴任した秋田藩士は横手給人を中心とした二団で、藩士以下足軽、従者まで二百六十八人が安政三年五月二十日より警備の任務に就き

ました。

安政四年（一八五七）六月四日に増毛を訪れた仙台藩士の玉虫左太夫は、陣屋を見て「長屋トテモ至テ極麗略、江戸表ニテ裏店ト唱ヘル小家ヨリモ返テ劣ル程ナリ」と書き記しています。

また玉虫は秋田藩士の訓練を前評判ほどではなかったとして「訓練ノ事ハ捨テ置キ名義通り一通り砲術ノミ御覽ニ入りケル。皆々失望帰刻ノミ急ギケル次第ナリ」と記しています（『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』一九九二年 北海道出版企画センター）。



展示史料一覽

	整理記号	史料名	年代	大きさ(cm)	前期	後期
文化四年の箱館出兵	県C-361	箱館七重浜御陣屋之図	文化4年	77×131	○	
	混7-565	函館細絵図全		74×129	○	○
	落1503	秋田藩函館守備之図	大正3年	152×169	○	
	県C-364	松前箱館絵図		51×56	○	
	県C-372	南部屋敷図		29×40	○	
	県C-360	餌指湊地図写	文化4年	115×163		○
	県C-362	松前市中絵図		114×220		○
	AH393-16	大山矢五郎日記	文化4年	25×17	○	○
	A393-2	松前箱館御加勢日記(上遠野子之助)	文化4年	15×19.5	○	○
	A393-3	松前御加勢日記	文化4年	25×18	○	○
	秋田県立図書館 庵97	沼井四郎兵衛日記	文化4年		○	○
県C-398	唐太島クシュナイ弁天社へ唐人渡来之掛置候絵図	文化3年	28×39	○		
対外危機の高まり	乙159	三国通覧図説	天明5年	53×78	○	
	弥高145・146	自走火船図			○	
	弥高131・136・139	禦侮儲言下			○	
	弥高147	異風砲異様船製作記			○	
	弥高148	新製小艇放大銃纏全			○	
	県C-357	チュブカ諸島の図	寛政12年	82×79		○
	県C-354	ロシアの絵図		109×61		○
	県C-363	松前絵図	文化3年	159×148		○
	混25-176	改正蝦夷全図		58×46		○
	A292-31	蝦夷地絵図		111×74		○
県C-366	蝦夷地闊境輿地全図		125×99		○	
海岸絵図	県C-598	海岸絵図		235×535	○	○
	地7	男鹿半嶋図		27×490	○	
	AT290-1	領内海岸絵図		41×176		○
	県C-171	出羽国山本秋田河辺郡村々海岸絵図		197×653		○
台場の築造	県C-131	山本郡八森村海岸絵図		26×80	○	
	県C-132	山本郡八森村絵図		40×82	○	
	県C-251	百三段濱田村之内中村御台場絵		39×109	○	
	斧5003	口上覚(渡部斧松)			○	
	県C-124	岩館村字釜ノ上御台場絵図		28×60		○
	県C-110	百三段新屋滝之下台場絵図		55×78		○
	斧5019	秋田郡舟川村台場築立料		25×17		○
A393-8	御備大砲有弾取調帳	文久3年	23×16		○	
安政の蝦夷地出兵	乙153	増慶御陣屋御任地面境内略図		55×114	○	○
	乙154	増慶元御陣屋地割絵図		122×79	○	○
	混7-553	宗谷出張御陣屋略絵図		60×46	○	
	混25-177	宗谷出張御陣屋絵図		76×40	○	
	AH312-267	演説覚(水戸部正蔵)	安政6年	16.5×157	○	○
	AH312-98	宗谷詰合日記	万延元年		○	
	混423-6-8	石井忠行日記八	慶応2年		○	○
	乙155	北蝦夷地クシュンコタン出張御陣屋絵図		70×54		○
	乙156	北蝦夷地クシュンコタン出張御陣屋境内絵図		55×76		○
	A292-10	ノトロよりシラルシエナ迄海岸略図		16×260		○

平成18年度 秋田県公文書館企画展
 秋田藩の海防警備 リーフレット
 平成18年8月25日 発行
 編集 秋田県公文書館古文書班
 発行 秋田県

Akita Prefectural Archives

秋田県公文書館

〒010-0952 秋田市山王新町 14-31 TEL018(866)8301 FAX018(866)8303
 URL <http://www.pref.akita.lg.jp/kobunsho/>